広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニーチェにおける優生思想と＜生の肯定＞の思想
Author(s)	後藤，雄太
Citation	ぷらくしす , 22 : 23 - 33
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50886
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050886
Right	
Relation	

ニーチェにおける優生思想と＜生の肯定＞の思想

Nietzsche's concept of eugenics and the affirmation of life

後藤 雄太（広島大学）
Yuta Goto (Hiroshima)

序

「ニーチェと優生思想」というと、一般的にはナチズムとの関係が真っ先に連想されるが、ニーチェ哲学を単純にナチズムと結びつけて切り捨てることが本稿の目的ではない。ニーチェ哲学それ自体は決してナチズムではない。例えば、人種主義、反ユダヤ主義はニーチェの思想に全く合致しないし、初期の頃を除くと国粋主義もまた然りである。

しかし、ナチス的な歪曲を取り除いてニーチェ哲学を理解した場合も、ニーチェが優生思想の持ち主であることだけは否定しきれない事実である。特に後期になるほど、その優生思想の表明が目立ってくる。例えば、中期から後期の過渡期に位置する『悦ばしき学問』では、障害を持って生まれた子どもを殺すことが「聖なる残忍」として勧められている(vgl. FW.106)[1]。さらにニーチェの思想的晩年に当たる1880年代後半ともなると、以下のような発言が散見されるようになる。

> 病人は社会の寄生虫である。ある状況においては、長生きするのは無礼なことである。(GD.128)
> 出産が犯罪となるようなすべての場合において――すなわち慢性疾患を持つ者、第三度の神経衰弱にある者の場合（中略）、必要な要求は、出産を阻止するということである。（中略）自分自身が存在する権利を持たない世界へ子孫を送り込むということは、生命を奪うよりも悪いことである。(VIII-3.15[3])

これらの発言が示しているのは優生思想以外のなにものでもないし、ニーチェ哲学のこうした要素が、結果的に優生主義者達を鼓舞し、後押ししてきたのは事実である。

ところが一方、周知のように、ニーチェは＜生の肯定＞を説く哲学者でもあった。病人や弱者の生を否定しておきながら、その一方で＜生の肯定＞を叫ぶなどといったことが果たして可能なのだろうか。そこには、やはり矛盾があると考える。すなわち、＜生の肯定＞の思想を徹底するならば、優生思想は維持できなくなるはずである。本稿では、ニーチェの思考における破綻を見定めつつ、＜生の肯定＞の思想の側に立脚して、ニーチェ哲学の「内部」から優生思想を打破する道を探っていく。

なぜニーチェ哲学の「内部」からの優生思想批判、すなわち「内在的克服」を本稿は試みるのか。それは、安直なヒューマニズム、人権礼賛の立場から外在的に優生思想を批判・糾弾するよりも、優生思想と＜生の肯定＞の思想の際どい境界線上で苦悩し思索しつづけたニーチェに寄り添いつつ、その思想の限界と可能性に向き合うことによってこそ、私たちの生を本当に肯定するためのヒントを掴み出すことができるように思われるからである。私たちは、苦悩から多くの人生の真実を学びうる。周知のよう

に、ニーチェ自身が虚弱な体質であり、病とルサンチマンにとことん苦しめられた人間であった。彼の哲学における優生思想および＜生の肯定＞の思想は、共に彼自身の生の苦悩から生い茂ったものだったのである。

1　矛盾の原因

まず結論から述べる。ニーチェが＜生の肯定＞を説きながらも優生思想に陥るという矛盾に陥った思想上の原因は、彼の後期思想の体系全体から判断すると、「ニヒリズム克服の思想が堅持されなかったため、生を価値判断の対象とする態度から脱却できなかった」ということにある。

1－1　ニヒリズムと＜生の肯定＞

ニヒリズムというと、確かな拠り所を欠いている状態を意味すると一般的には考えられているし、現にニーチェもそうした意味合いでニヒリズムという語を用いている。例えば、「ニヒリズムとは何を意味するのか？　――最高の諸価値が無価値になってしまうということ」(VIII-2.9[35])というよく知られた定義においては、ニヒリズムはまさに従来拠り所としてきた価値が失われた状態、すなわち「価値喪失」のことを意味している。

しかし、ニーチェにおいてニヒリズムは多義語である。彼にとって最も根本的な意味でのニヒリズムは、端的に言えばプラトニズムのことである。ニーチェによれば、プラトニズムとは、超感性的世界・背後世界に最高の価値を設定して、それに照らし合わせて生を価値評価する姿勢のことをいう。ギリシャ哲学と並んで西洋の思想を形作ってきたキリスト教も、「神」という超感性的価値を設定して、そこから生を価値評価するという姿勢を共有しているがゆえ、「民衆のためのプラトニズム」(JGB.4)に過ぎない。このプラトニズムが、ニーチェにおいてニヒリズムと呼ばれる理由は、プラトニズムは本来ありもしない「虚無」なる絶対的存在者や価値を捏造し、そこから生を意味づけようとする「虚無への意志」の発現であり、そこではこの生それ自体は否定されてしまっているからである(vgl.VIII-3.17[4])。

ニヒリズムという語には、さらにもうひとつの意味がある。それは、上記の「プラトニズムとしてのニヒリズム」とは正反対に、ニーチェ自身の思想的立場を指すニヒリズム、すなわち「あるがままの、割引もせず、例外も作らず、選択もしない世界そのもののディオニュソス的肯定」(VIII-3.16[32])を内容とする「最高の肯定の定式」すなわち永劫回帰を主張する立場のことである。永劫回帰思想においては、従来生に価値を付与してきた「起源」（アルケー）と「終末」（テロス）は粉砕され、価値が徹底的に否定されることによって、この生成の世界は無垢なるものとしてそのまま肯定されるのである。

以上の三つのニヒリズムは、ニーチェの思想体系において内的連関を有すると解釈できる。まず最も根本的なニヒリズムが、プラトニズムとしてのニヒリズムである。これは、本来ありもしない「無」なる超越的価値を捏造すること、すなわち、最高の価値を生の外部に立てることによって、この生を肯定しようとする態度を指していた。しかし、キリスト教自身が育んだ「誠実性」の徳によって、絶対的価値の捏造性が否定できないものになることによって、価値喪失というニヒリズムが生じることになる(vgl.VIII-1.5[71])。このニヒリズムは、いわゆる「神の死」すなわち従来信仰されてきた絶対的価値の喪失ゆえに、この生を否定的なものと感じてしまう傾向であり、もはや彼岸を信じることはできないが、そうかといって此岸も信じることができない状態である(vgl.VIII-2.9[60])。このニヒリズムこそが、現代

という時代を支配する空気であるが、ニーチェによれば、それはプラトニズムとしてのニヒリズムから不可避に帰結した「中間状態」に過ぎない(vgl.VIII-2.11[100])。ここで重要なのは、単にプラトニズムが没落したがゆえに、プラトニズムの対立物として、価値喪失というニヒリズムが生じたのではなく、実は、プラトニズムそのものが、イデアや神という無なるものに生の肯定の根拠を求め、生それ自体を否定していたという点で、すでにニヒリズムだったということである。

よって、現代における価値喪失のニヒリズムの蔓延は、ニーチェにとっては、決して全面的に否定されるべき事態ではない。このニヒリズムは、超越的な価値を設定し、そこから生の意味を引きだそうとするプラトニズム的世界解釈を解体するという点では、ニーチェにとって肯定的な意義を持つ過程であり、歓迎すべき事態でさえある。だからこそ、このニヒリズムは「ひとつの正常な状態」(VIII-2.9[35])であるとニーチェは言っている。もちろん、それは「超越的な価値を根拠にこの生を肯定する」といった発想に未だ囚われることによって、この生をそれ自体としては否定的なものとしてしか見ることができない「中間状態」にあり、そこに留まるべきではない。こうして、ニーチェ自身の立場を表す徹底的で完全なニヒリズム、すなわち永劫回帰思想が要請されてくるわけである(vgl. VIII-2.9[1])。「ニヒリズムを徹底する」とは、価値喪失というニヒリズム、すなわち中間状態のニヒリズムを徹底するということであるが、それは最高の価値を根拠にこの生を肯定するというプラトニズム的発想から完全に脱却し、この生を無条件に、根拠なしに、そのまま肯定するということである。その肯定は、単に自己の生のみならず、すべての存在者の存在へと向けられている。なぜなら、それらは互いに関係しあって初めて存在しているからだ。

> 厭うべきものそれ自体などは存在し得ない。およそ生起するもの一切は、それ自体として厭うべきものたりえない。なぜなら、私たちがそれを除いておこうというわけにはいかないからである。なぜなら、あらゆるものは一切は結びつけられているので、何か或るものだけを締め出そうと思うのは、一切を締め出すことになるからだ。(VIII-3.14[31])

> それが何であれ、およそ存在している限りは、無い方がましだと言われるようなものは何一つとして無いはずである。(EH.309)

以上のように「あらゆる生の無条件の肯定」へと導くところに、ニーチェにおけるニヒリズム論の要諦がある。[2]

１－２　価値評価の対象としての生

ニヒリズム=プラトニズムでは、生は超感性的世界・背後世界にある外的な価値を根拠に初めて肯定されるのであり、生それ自体は否定的なもの、少なくとも二次的なものとされてしまっていた。

しかし、生はあらゆる価値の産出の源（力への意志）であり、まさにそれゆえに、生それ自体はもはや価値評価の対象にはならない。換言すれば、遠近法の視点の存在それ自体は、遠近法の対象にはならない――眼は自らを見ないように。

> あらゆる価値評価は、この一つの意志に仕える結果であり、より狭い遠近法であるにすぎない。価

値評価すること自体は、この力への意志に過ぎないのだ。したがって、これらの価値のうちの一つによって存在を批判するのは不合理で誤ったことだ。(中略) 存在そのものを査定するということ。だが、この査定すること自体が、やはりこの存在なのだ——。したがって、私たちは否といいながら、相変わらず私たちのあるがままを行っているのである……生を裁こうとするこのような不条理をまず洞察しなければいけない。(VIII-2.11[97])

生成は価値というものを全く持たないのだ。なぜなら生成には、生成を測定するためのなにものか、すなわちそれと関連して初めて「価値」という言葉が意味を持つようになるなにものかが欠けているからである。(VIII-2.11[72])

生はそれ自体として無条件に、すなわち外的な価値評価なしに肯定されるべきものである。つまり、超越的視点から何らかの価値——たとえ肯定的なものであるにせよ——が付与されることによって生は肯定されるのでなく、そのままに肯定されなくてはならない。

しかしニーチェは、こうしたニヒリズム論の帰趨に反して、生を再び価値評価の対象へと貶めてしまっている。すなわち、プラトンやキリスト教ほど形而上学的ではないかもしれないが、外的な最高の価値——彼の古代ギリシャ的マッチョイズムへの偏愛やナポレオンなどの英雄崇拝に基づいた——を導入し、そこから生を価値判断し、人間を類型化している。「生に対する価値づけ」という発想の磁場に引きつけられるとき、後期における主要思想である「超人」「力への意志」そして「永劫回帰」は、生への暴力的な断罪の思想体系を形成し始める。そしてニーチェ哲学は、キリスト教も顔負けの誇大妄想へと陥っていくのである。

まず、「超人」は未来の人間が達成すべき「目標」として設定される——「「人類」ではなく、超人こそが目標である！」(VII-2.26[232])。この超人が意味するところのものは、いわゆる「金髪の野獣」、生理学的強者、大地の支配者、未来の立法者とされる。そして、この超人という「最高の価値」に照らし合わせて、人間の生は選別され、断罪される。

ひとりの人間がどんな権利を許されているかは、その人の価値が証明すべきである。（中略）大抵の人間は、存在する権利がない。むしろ彼らは、より高級な人間にとってひとつの禍いである。(VII-2.25[343])

そして、「力への意志」は、もともと中期におけるモラリスト風の暴露的心理分析に端を発する概念であったが、後期に移行するにつれ、未来における統治者たる超人が弱者を支配し、その力を拡大することこそを善しとする規範概念としての意味合いを強めていく。

後期思想のこのような側面が、ナチズムを正当化する材料になってしまったことは、やはり否定しがたい事実である。妹エリザベートが、ナチズムにすり寄った『力への意志』という偽書を捏造することや、ナチス御用哲学者であるボイムラーが、力への意志の思想を偏重した解釈を施すことを通してニーチェ哲学をゲルマン民族のための「決断と行動の哲学」としてナチズムに取り込むこと[3]は、さほど困難な作業ではなかったはずである。また、このような側面だけを見る限りは、ハイデガーのニーチェ講義において、超人が近代的主体の完成形態と見なされているのも[4]、首肯できる。超人は、近代的理性に秘

められていた暴力性を顕在化した者でしかないのだ。

ニーチェにおける超人および力への意志の思想においては生が対象化され、あたかも価値評価が可能であるかのようなものになってしまっている。そこにおいて無垢なる生成は回復されておらず、プラトニズムとしての根源的ニヒリズムは解消されていない。すなわち、生は「あるべき理想」に基づいてその是非が定められるのであって、無条件に、すなわち価値評価なしに肯定されているわけではないのである。

そのことを証すように、あの「最高の肯定の定式」であったはずの永劫回帰思想までもが、「生に対する価値評価」という発想の磁場に引きつけられ、超人や力への意志の思想と連携するとき、生の選別手段として機能し始める。ニーチェは、永劫回帰思想を「ハンマー」に喩えているが(vgl.VIII-1.5[70], VIII-3.13[3])、その比喩の意味は、ハンマーがものを壊すという役割と同時にものを創造する機能も持っているように、永劫回帰思想は、従来の価値を破壊すると同時に、新たな価値を創造するということである。この場合、永劫回帰思想は、生の無意味に耐えられない「弱者」と、その主体性によって恣意的に価値を創造することを「決断」できる支配者としての「強者」とを振り分ける装置として働くことになる。

> ハンマー。恐るべき決断を引き起こすこと。ヨーロッパをして、その意志は没落を「欲する」のか否か、帰趨を決させること。(VIII-1.2[131])

> 私の哲学は、あらゆる他の思考法が最後にはそれで徹底的に没落するところの、勝ち誇れる思想をもたらす。それは、育成する偉大な思想である。すなわち、この思想に耐えられない種族は断罪されており、この思想を最大の恩恵として受け取る種族は、支配者たるべく選び出されている。(VII-2.26[376])

こうして永劫回帰思想は、皮肉なことに、ニーチェ流の「最後の審判」として、ある種の終末論的色彩を帯びてくる。キリスト教における生への裁きの思想を斥けるための思想であったはずの永劫回帰思想が、生に対する新たな断罪の思想の座を占めるようになるのである。永劫回帰思想というハンマーは「裁きのハンマー」でもあるのだ。さらに言えば、「将来、理想的存在者によって世界が救済されることを期待する」という点においては、超人思想はメシアニズムの一種であり、「人間を計画的に改良していく」という点においては、近代的な進歩思想の一種なのである。

1－3 優生思想はニヒリズムである

生を価値評価の対象とする姿勢こそ、ニヒリズムの本質であった。そうだとすると、優生思想もまた、ニヒリズムということになる。優生思想においては、生の外部に何らかの価値（自己意識や自立能力など）を設定し、その有無・多寡によって生は価値評価される対象となってしまっているからだ（現に優生学では、障害者のことを「低価値者」と呼ぶ）。

ニーチェはニヒリズム克服の思想を堅持することができなかったため、生を価値評価の対象とする態度から離脱できず、優生思想を呼び込んでしまった。ニヒリズム=プラトニズムと優生思想は切っても切れない関係にある。このことを、西洋哲学史から簡単に確認しておこう。

まず、プラトニズムの創始者プラトンであるが、周知のように彼は優生主義者だった。彼によれば、

人間の尊厳は超感性的なものである「魂」にあるのであり、身体などは重要でない。こうした身体蔑視の形而上学を背景に、彼は「生まれついての病気持ちで不摂生な者は、本人にとっても他の人びとにとっても生きるに値しない人間」[5]であるとし、障害者のために医療を用いる必要はないと説くとともに、彼らの生殖の権利を否定している。

さて近代になると、「最高の価値」は理性に置かれるようになる。個人主義、主体主義の始まりである。近代哲学の代表者であり、リベラリズムの思想的基盤の提供者はカントであるが、個人の自由を最大限に尊重しているかに見える彼も、実は優生主義者であった。例えば彼は精神病者の婚姻規制に賛成して、こう言っている。

> 母体の胎児が成長していくのと同時に、精神異常の芽も成長していく。つまり精神異　常もまた遺伝性のようである。そうした人物がただ一例でも以前にいたという家系の人と婚姻関係を結ぶことは危険である。[6]

カントにおいて自由が認められるのは、あくまで自立した者、理性ある者のみである。近代的な理性主義において、理性を持つ自立した者が、自立能力のない、理性を持たぬ者を「低価値者」として排除する構造がもたらされたのである。優生思想というと、一般的にはナチズムと重ね合わせてイメージされることが多いこともあって[7]、近代的理性に反する野蛮として受け取られているが、実は違う。そもそも断種法を世界で最も早く制定したのは「自由の国」アメリカであり、その実績をナチスは参考にしたという歴史的事実にも象徴的に表れているように、西洋のプラトニズム=ニヒリズムの伝統に根ざす理性主義・合理主義がもたらした必然的結果の一つが優生思想なのである（現代のバイオエシックスにおけるパーソン論が、こうした思想的地盤から生い茂ってきたものであることは言うまでもない）。

そしてニーチェに至って、近代的理性に秘められた暴力性が顕在化する。彼の優生思想においては、「理性を有さない者」という限定さえ超えて、「超人」という理想に照らし合わせて「低価値者」と判断された弱者の生が否定されていく。そして、先述したように、ニーチェ哲学のこうした側面が、結果的にはナチズムへと思想的根拠を提供してしまうことになるわけである。ニーチェやナチズムにおける優生思想も、思想史の大きな流れから理解するならば、西洋におけるプラトニズム=ニヒリズムの伝統の一支流に過ぎない。「何らかの外的な価値を設定し、生を価値評価の対象とする」という点においては、キリスト教、リベラリズム、ナチズム、これらはみなニヒリズムである。

ニヒリズムの克服を目指したニーチェが弱者に対して為すべきだったことは、本来ならば、弱者の「生」を否定することではなかったはずである。否定すべきは、「外的な価値に依拠して自己や他者の生を否定し、生の苦しみに向き合うことから逃避すること」という「弱さ」であって、弱者の「生それ自体」ではないはずである。外的な価値――それが神であれ、理性であれ、何らかの理想であれ――を根拠にしてしかこの生を肯定できないニヒリズムから脱却し、自分の生をありのままに肯定し、生の苦しみとも向き合っていくことへと他者を誘い、自らも実践していくことこそ、ニーチェが為すべきことだったのではないか。例えば、彼は、中期の頃から、自らの闘病体験に基づきつつ病をも何らかの利益を生にもたらすものとして積極的に受け止めていく姿勢を所々で表明しているが(vgl.MAI.190, MAII.158)、その発想をさらに思想的に洗練させ、病や弱点、欠陥と付き合っていくための＜生の技法＞へと高めていく道もあったのではないか。現に彼は、思想的晩年に当たる 1888 年春に、強者礼賛の思想を自省するかのよ

うな内容の断章も遺している。

> ひょっとしたら弱者や中級者の勝利には、生の、類のより大きな保証があるのではなかろうか？（中略）――もし、強者が、すべてにわたって、価値評価においても支配者となったとしよう。弱者たちが病気や苦悩や犠牲に対してどう考えるだろうか、ということについて私たちはどう結論を出すだろう？　結果は弱者の自己軽蔑ということになるだろう。彼らは消滅し、自己抹消することを求めるだろう……。これは望ましいことであるだろうか？……/――そして、私たちは本当に、弱者の影響が、彼らの繊細さ、気配り、知性、しなやかさが見られなくなった世界を、望んでいるのであろうか？…… (VIII-3.14[140])

こうした発想を育み、弱者の生さえも肯定していくことこそ、苦悩をも含めたありのままの生に然りを言う「ディオニュソス的肯定」の哲学者には相応しかったはずである。それにもかかわらず、あまりにも西洋的な断罪の思想にニーチェは足をすくわれてしまったのである。

ニーチェの優生思想は弱者の生を否定していた。しかし、ニーチェ自身は、その病苦に満ちた人生にもかかわらず、最期まで――それこそ、精神的破綻に至るまで――生き抜いてみせたではないか。自らの強者礼賛の思想に本当に忠実に従うなら、病弱で年金暮らしの彼はさっさと自死を選ぶべきであったはずである。もちろん、彼は生き続けてよかったのである――廃人になった後でさえ。問題は、彼の「思想」が彼の「生」を裏切ってしまっているということである。私たちは、この生を裏切らない仕方で、＜生の肯定＞の思想を紡ぎだしていかなければならない。

2　生を肯定するということ

外的に付与された価値――それがたとえ肯定的な価値であるにせよ――によってではなく、生をそのまま肯定するということが、ニヒリズム論の本来的意義であった。この節では、そうした本来的意義に忠実に沿い、優生思想に陥ることなく、ニーチェにおける＜生の肯定＞の思想の可能性を見出してみたい。その際、特に注目したいのは、＜子ども＞および＜中庸の人＞としての強者の在り方である。

2－1　＜子ども＞としての強者

金髪の野獣、生理学的強者、未来の立法者としての「超人」とは異なる、ニヒリズムの克服者、強者の姿としてまず注目したいのは、『ツァラトゥストラ』における＜子ども＞である。

> 子どもは、無垢であり、忘却であり、新たな始まり、遊戯、おのずから回転する車輪、第一運動、聖なる肯定である。(Za.25)

超人には、強力な主体性や恣意性が感じられるのに対して、＜子ども＞は、「忘却」という規定にも象徴されるように、むしろ脱自性を巧みに表現している譬えである。確かに、実際に幼子を見てみれば、彼らは強力な主体的意志で何らかの価値を「対象としての生」に付与することによって自己を肯定して

いるのではない。彼らは端的に、根拠なしに、おのずから自己の生を肯定しているに過ぎない。それは自然の力そのものによって自己肯定していると表現してもよいかもしれない。ニーチェは 1888 年春の遺稿で「それ自体として、在るものすべては、然りを語っている」(VIII-3.14[31])とも述べているが、確かに、生の肯定とは、なにも価値設定的な意志による肯定、それこそ「力んだ」肯定である必要はないのである。

ニーチェが言うように、確かに＜子ども＞は「新たな価値の創造者」ではあるが、彼らの「創造」は、主体による恣意的な価値付与のことではないだろう。芸術において、真の創造はむしろ創作者の計算を超えたところから訪れるものだということが古来言われているが、＜子ども＞による創造も、そうした根源的な受動性を特質とするものとして理解できる。

ニーチェの思想的後継者達のなかでもバタイユは、こうした脱自的な、価値設定的でない力の発現の仕方に非常に敏感な人であった。バタイユは、「力」を、フォルス(force)とピュイサンス(puissance)とに区別している。フォルスは、定めなさ、気ままさ、瞬間性を特質とし、決して持続的なものとはならない。それは、何ら目的を持たないという点で、無用とさえ言えるような性質のものである。一方のピュイサンスは、他なるものに影響を及ぼして、これを自分の意のままに変化させる作用であり、より多くのものを支配して所有し、自己を強大にしようとする働きのことである。ピュイサンスは、もともとフォルスをその源としているのではあるが、そこに理性が介在し、人間主体の存続・拡大のためにフォルスをピュイサンスに変えて運用しているのである。こうしたピュイサンスは、持続性・固定性を特質とし、目的を達成するための計算を行う。バタイユによれば、このピュイサンスこそ、近代ヨーロッパにおける自然および他文明の支配を駆動したものにほかならない。それに対して、瞬間的なもの、無用なものであるフォルスは、社会や政治の場においては、むしろ「無力」(impuissance)でさえある。このようなフォルスの強烈な発現は、何らかの目的を目指す企ての主体に、非主体化・非個体化を要請する[8]。これら二つの力のうち、バタイユが肯定しているのは、言うまでもなくフォルスであり、ピュイサンスへと転化することなしに、高い強度のフォルスが発現することを彼は望む。バタイユはニーチェの言う「力への意志」を「ピュイサンスへの意志」として非難しているが、先に述べたように力への意志は主体性の濃厚な概念であるがゆえ、こうしたバタイユによる批判も十分に根拠のあるものではある。しかし、＜子ども＞としての強者における力は、むしろバタイユのフォルスの方に親和的である。

このような＜子ども＞における力の発現においては、永劫回帰もまた、主体的な決断と選別のための「ハンマー」であることをやめるだろう。＜子ども＞は「遊戯」や「おのずから回転する車輪」であるとニーチェによって規定されていたように、＜子ども＞における永劫回帰は、いかなる根拠も目的も有しない、ヘラクレイトス的な世界遊戯を意味するものとして理解できるだろう。[9]

２－２　＜中庸の人＞としての強者

私たち大人も、根源的には＜子ども＞である。大人の世界の様々な謀によって見失われてしまってはいるが、私たち大人のなかにも＜子ども＞は生き続けている。ニーチェにおける＜子ども＞の譬えは、私たちの中に眠っていた根源的な生の肯定の力を呼び覚ましてくれるような譬えであるように思われる。

もちろん、私たちは単純に子どもに帰るわけにはいかないし、できもしない。私たちがあくまで「大人」として――根源的には内なる＜子ども＞の端的な肯定の力に基づきつつも――現実世界を生き抜いていくヒントも、ニーチェは遺してくれているように思われる。それは、以下の＜中庸の人＞としての

強者像から読みとれる。

> 最強者であることが明らかになるのは、どのような人であろうか。それは、最も中庸の人々(Mäßigste)である。つまり、極端な信仰箇条を何ら必要としない人々、かなりの偶然、無意味を認めるだけではなく愛する人々。人間の価値をかなり減少させて考えることができ、そのときそう考えることで卑小になったり軟弱にならない人々。豊かな健康に恵まれ、たいていの不幸に負けることがなく、それゆえに不幸を恐れることがない人々(VIII-1.5[71])

ここでは、「最強者」とは「最も中庸の人」のことであるとされる。それは、「極端な信仰箇条」すなわち神などの超越的価値から生の意味を引き出そうとしない人であり、それゆえに生に不可避な「偶然」や「無意味」を受け入れるだけでなく、それを愛する人――この愛には、明らかに「運命愛」に通ずるものがある(vgl.VIII-3.16[32]) ――である。よって、最強者とは、プラトニスト（すなわち、根本的な意味でのニヒリスト）ではない。また「人間について考える時に人間の価値を相当に減少させて考えることができ」るから、いわゆるヒューマニスト（人間中心主義者）でもない。さらに、その際に「卑小になったり、軟弱になったりしない」から、彼は、一般的な意味でのニヒリスト（すなわち、「価値喪失」に悩み苦しむニヒリスト）でもない。要するに、最強者の「中庸」とは、プラトニズムという意味でのニヒリズムに陥らないと同時に、そのプラトニズムの崩壊の結果として必然的にもたらされた「中間状態」としての価値喪失のニヒリズムにも陥らないという意味での「中庸」なのである。この点において、＜中庸の人＞は＜子ども＞と似ている。なぜなら＜子ども＞もまた、プラトニストでもニヒリストでもないからである。

「豊かな健康に恵まれている」――ここでの健康とは、もちろん単なる肉体的な健康ではなく、「不幸」に負けない力であろう。この「不幸」とは、理性によっては克服しがたい様々な生の偶然によってもたらされる自己の無力や病だとすると、「不幸」に負けない力とは、こうした「不幸」と向きあい、付き合っていけるという力である。この健康は、何らかの外的な価値に寄りかからなくても、自らの生を根源的なところから肯定していること、すなわち、あの＜子ども＞の生の端的な肯定の力に基づく。この根源的な健康ゆえ、生の偶然がもたらす不幸を必要以上に恐れる必要はないわけである。

上記の引用では、「中庸」というアリストテレス風の――ニーチェ哲学としては意外性のある――表現が用いられていることもあって、「超人」という言葉が通常もたらしがちな威勢の良い、エキセントリックな強者像が中和されている。例えば大乗仏教などでも、真の覚者は、ごく普通のありふれた人間として――いや、それどころか一般的価値観からすれば弱者や愚者や非生産者として、バタイユの言葉で表現すれば「無力」(impuissance)な者として――世間のなかに生きているものだという見方があるが、ここでの強者像にもまた、そうした側面を見出すことができる。真の強者は、この市井の片隅にこそ見出すことができるかもしれない。

3 苦しみとともに生きる

障害を持ち、様々な悩みや苦労と向かい合いつつも幸福に暮らしている障害者やその家族はまさしく

「中庸の人としての最強者」に当たるのでないか。障害をもって生まれてきたことは「偶然」に過ぎず、その意味で障害者の生――および障害者を授かった親の生――は罪のない、無垢なるものである。それにもかかわらず、私たちの社会は、生を「価値評価の対象」にしてしまい、「障害を持って生きることは不幸だ」「障害者は社会の負担だ」等といった思考によって生を裁き、否定する態度からなかなか抜け出せない。一方、そうした社会からの否定への反動もあって、障害者運動においては「障害こそは私のアイデンティティだ」「障害児は天使だ」等といった類の主張に見られるように、「障害」に過大な「価値」を付与して生を肯定することによって抵抗がなされてしまうこともある。しかし、これらはどちらも生に対する「極端」な態度なのであり、ニヒリズムなのである（もちろん、運動の「戦略」としては、障害にプラスの価値を付与することも必要なのかもしれないが）。

本当の生の肯定は、そういった態度からはやってこないように思える。多くの障害者とその家族における生の肯定は、もっと端的で、自然なものに感じられる。障害も持ちながらも、その者の生は端的な自己肯定の力を放っている。その力に共振することによって、家族をはじめとする周囲の者達は、「障害者は不幸だ」「障害者は社会の負担だ」などといった様々な偏見や効用の計算による「生への裁き」の姿勢が打ち破られていく。それは、家族をはじめとする周囲の者達が、自分自身に対して行ってきた、様々な偏見や効用の計算による「生への裁き」から解放されるきっかけになり、彼らもまた自分自身の生を肯定する力を回復していくのである。障害児の親からは、様々な苦悩や苦労を抱えているにもかかわらず、「この子の存在が大切なことに気づかせてくれた」とか「生まれてきてくれてありがとう」といった趣旨の発言がしばしば聞かれるが、それらは必ずしも単なる強がりや綺麗事ではないと思われる。彼らの生への姿勢に、苦悩さえも含めたありのままの＜生の肯定＞[10]が表れている（例えば、社会福祉法人「浦河べてるの家」のモットー「順調に問題だらけ」「病気に助けられた人生」「安心して絶望できる人生」等にも、そうした生の肯定の在り方を見出すことができる）。彼らは、超越的な「神」ゆえでも、抽象的な「人権」ゆえでもなく、ただその子の生と、その子に出会った自分の生それ自体を端的に愛し、自らの生の偶然を享受しているのである。

[1] ニーチェの著作および遺稿断片からの引用・参照は *Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe,* hrsg. von Giorgio Colli und　Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, 1967ff, Berlin を用いる。著作からの引用箇所は、以下に示す略号・頁数の順で（　）内に記す。遺稿断片からの引用箇所は、Kritische Gesamtausgabe の巻数（ローマ数字）と分冊番号、断片番号の順で同じく（　）内に記す。

EH: *Ecce Homo* in: Kritische Gesamtausgabe, VI-3.

FW: *Die fröhliche Wissenschaft* in: Kritische Gesamtausgabe, V-2.

GD: *Götzen-Dämmerung* in:Kritische Gesamtausgabe, VI-3.

JGB: *Jenseits von Gut und Böse* in:Kritische Gesamtausgabe, VI-2.

MAI: *Menschliches, Allzumenschliches I* in:Kritische Gesamtausgabe, IV-2.

MAII: *Menschliches, Allzumenschliches II* in:Kritische Gesamtausgabe, IV-3.

Za: *Also sprach Zarathustra* in:Kritische Gesamtausgabe, VI-1.

[2] ニーチェのニヒリズム論に関しては、後藤雄太『存在肯定の倫理 I　ニヒリズムからの問い』ナカニシヤ出版、2017 年、第 2 章を参照されたい。

[3] vgl., A. Baeumler, *Nietzsche. Der Philosoph und Politiker*, Reclam, 1931.

[4] vgl., M. Heidegger, *Nietzsche II*(Gesamtausgabe, Bd.6.2, Vittorio Klostermann, 1997). S.262-282.

[5] プラトン『国家』第三巻 408Ｂ。

[6] I.Kant, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*(Werkausgab*e*, Bd.11, Suhrkamp, 1977), S.533.

[7] 優生思想は、必ずしもナチズムのように人種主義や国粋主義と結びついているわけではない。現に、本論文の冒頭でも触れたように、ニーチェも優生思想の持ち主ではあったが、人種主義者や国粋主義者で
はなかった。

[8] cf., G. Bataille, *Sur Nietzsche, volonté de chance,* Gallimard, 1945（酒井健訳『ニーチェについて好運への意志』現代思潮社、1992 年）

[9] ニーチェ哲学によるニヒリズム克服の可能性に関しては、後藤『存在肯定の倫理Ｉ』第 4 章を参照されたい。

[10] B. Reginster, *The Affirmation of Life: Nietzsche on Overcoming Nihilism*, Harvard University Press, 2009（岡村俊史・竹内綱史・新名隆志訳『生の肯定　ニーチェによるニヒリズムの克服』法政大学出版局、2020 年）は、特にニヒリズム克服における苦悩の意義を強調している点で、重要な業績である。しかし、そのニーチェ解釈は、「子ども」「遊び」「笑い」「踊り」等の言葉に象徴されるようなニヒリズム克服の思想の軽快で非効用的な側面を十分に反映できていないように思われる。